様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　6 月　4 日現在

機関番号：14301
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21320020
研究課題名（和文）
一九一二〇世紀転換期における「戦争ロマン」の表象についての比較文化史研究
研究課題名（英文）　The representations of "war romanticism" at the turn of the century (19th to 20th): a comparative cultural history
研究代表者
山室　信一　（YAMAMURO SHINICHI）
京都大学人文科学研究所・教授
研究者番号：10114703

研究成果の概要（和文）：(200 字程度)
本研究においては、女性や子ども更には植民地における異民族までが熱狂をもって戦争に参与していった心理的メカニズムと行動様式を、各国との比較において明らかにすることを目的とした。そこでは活字や画像、音楽、博覧会などのメディアが複合的に構成され、しかも複製技術の使用によって反復される戦争宣伝の実態を明らかにすることができた。そして、このメディア・ミックスを活用する重要性が認識されたことによって、外務省情報部や陸軍省新聞班などが創設されることとなった。戦争ロマンの比較研究から出発した本研究は、戦争宣伝の手法が「行政広報」や「営利本位の商業主義」に適用されていく歴史過程を明らかにすることによって、総力戦という体験が現代の日常生活といかに直結しているのかを析出した点で重要な成果を生んだ。

研究成果の概要（英文）：
Our project has aimed at making clear, with a comparative perspective, the reasons for and the way of the enthusiastic participation in the war, which was demonstrated by women, children and even colonized peoples. It has been found out that the war propaganda, including such various media as printed words, images, music and exhibitions, which was endlessly repeated by the use of reproduction technology, played somewhat a crucial role. It was precisely because the government did realize the importance of such propaganda that the Intelligence Department in the Foreign Office and the Newspaper Division in the War Office were set up. The very technique of war propaganda was to be adopted by the government's official publicity and commercial publicity business. Our project has closely examined this historical process from various viewpoints.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
21 年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
22 年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
23 年度	2,900,000	870,000	3,770,000
年度			
年度			
総　計	11,200,000	3,360,000	14,560,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・思想史・比較思想史
キーワード：第一次世界大戦、文化、プロパガンダ、総力戦体制、芸術史、大衆文化

１．研究開始当初の背景

二〇世紀の戦争において果たした動員メディアについての研究は、とりわけ第二次世界大戦ならびにナチス・ドイツを中心として、これまでも無数になされてきた。それに対して本構想は、「メディアによる戦争の世紀」たる二〇世紀が準備されていったプロセスを、とりわけ一九～二〇世紀転換期に焦点を当てて明らかにし、同時にこうした国民動員メディアの日本における受容史を辿る比較文化史的研究を目指すものである。ヨーロッパで戦争がなかったベルエポックの間に国民動員メディアがどう作用し、どのように総動員体制への空気が醸造されていったか。例えば第一次世界大戦において、いわば「まんまと」総力戦が可能になったのはなぜか。そして日本は、この新たな「居間／日常生活の中に入ってくるメディア」をいかに受容し、いかに応用したか。これが本研究の中心となる問いである。

いうまでもなく第一次ならびに第二次世界大戦の特徴は、それが一握りの支配者ではなく、時としてそれが支配層の統制を逸脱するほどの、広汎な大衆の支持と熱狂を伴った点にある。「一つの民族は一つの国家をもつべし」とするナショナリズムは、「強くなければ国家は生き残れない」といった俗流ダーウィニズムの社会進化論と結びつき、絶えざる戦争準備状態を暗黙の存立前提とする一九世紀の国民国家を生み出した。だが既に一九世紀後半から軍事コストは飛躍的に上昇し、にもかかわらず（少なくともヨーロッパにおいては普仏戦争以後）戦争が起こらないので賠償金による財政確保もままならないため、軍備増強に必要な税金を上げるべく、ヨーロッパ列強においては、必要な一般市民の支持をとりつけるための愛国教育が熱心に行なわれるようになっていた。この状況が、映画やラジオやフォノグラフといった新しいメディアと結びついて惹起されたのが、二〇世紀的な総動員体制による数々の「大戦争」である。

史上初の総力戦であった第一次世界大戦を、特に開戦当初、国民の大多数が熱狂的に迎えたことはよく知られている（日露戦争は新聞や軍歌や写真雑誌といった国民動員メディアが大きな役割を果たした最初の例であるが、ここでも事情は同じであった）。だがここで注目されねばならないことは、戦争そのものにおいて動員メディアがいかなる役割を果たしたのかということ以上に、戦争をあれだけ熱狂的に迎える心性が、既に開戦当初において国民の間に十分すぎるくらい涵養されていたという事実である。

２．研究の目的

本計画が対象とするのは、世紀転換期におけるイギリス・ドイツ・フランスの国民動員メディアの諸相ならびに同時代の日本におけるその受容である。時代を世紀転換期に絞るのは、まさに第一次世界大戦以後の「二〇世紀の戦争」を特徴づけるものの一つがプロパガンダであり、それがいわば潜伏状態にあったのが、この時代であったと考えられるからである。また比較対象として日本における状況を検討する理由は、日本ではすでに日清戦争から戦争写真などが雑誌で取り上げられ、さらには日露戦争においてマスメディアが国民の「戦意高揚」に大きな役割を果たすなど（２０３高地のディオラマなども当時大変人気があった）、プロパガンダが欧米に先駆けてすでに実践に移されていた部分があるからである。

これらの研究に際してとりわけ重要となるのは、第一次世界大戦へのその影響であり、いわば世紀転換期の中における大戦の前史を明らかにするということが、本研究の最大の目的であるといってよい。欧米においては、（第二次大戦ではなく）第一次大戦こそを本来の 20 世紀の起点と位置づけ、個々の研究者にはその総体をフォローすることも困難なほど膨大な研究成果が送り出し続けられてきた。しかるに、日本における第一次大戦研究の蓄積は、日露戦争や第二次世界大戦のそれと比べて貧弱であり、同時代の日本とその植民地に及ぼしたインパクトも、「現代世界」に対するその歴史的な意義も、充分に認識されているとは言い難い。また欧米においてさえも、戦争自体についての研究は大量にあるにせよ、必ずしも「世界性」および「持続性」について十全に明らかにされてきたとは言えない。これらを研究するに際しては、第一次世界大戦「から」すべてが変わったという考え方を廃し、むしろ第一次世界大戦の前に既に「総動員体制」による世界的な大戦を可能にする諸条件が十二分に用意されていたという見方をすることが重要である。本研究はこうした視座の下になされるものである。

３．研究の方法

本研究においては、京都大学人文科学研究所において、月２回の研究会を定期的に行った。実施にあたっては、代表者の山室信一が全体を統括し、雑誌研究においては小関隆がイギリス関係を、藤原辰史がドイツ関係を、久保昭博がフランス関係を、片山杜秀が日本関係を担当した。また王寺賢太および小田川大典は世紀転換期ヨーロッパの愛国思想を調査した。音楽演劇についてはヨーロッパ関係を岡田暁生が、日本関係を片山杜秀が担当した。

またポスターおよび玩具については、伊藤順二および服部紳および河本真理および早瀬晋三が担当した。またデータ分析と並ぶ本研究の中心課題としたのは、現地調査ならびに一次資料の収集を通した画像（映像）の収集である。なお研究会の成果については、京都大学人文科学研究所の人文情報学センターＨＰ（共同研究班「第一次世界大戦の総合的研究」ＨＰ）において、そのタイトル等の情報を公開した。

４．研究成果

この研究の最大の成果は、第０次世界大戦ともいえる日露戦争において発現していた外交および内政における政治宣伝の重要性についての認識が、総力戦としての第一次世界大戦を通じて国家機構の再編成や植民地統治の手法にも深甚なる影響を与えていった過程を、日本のみならず東アジアという地域世界との連関の中で明らかにしえたことにある。先ず、世紀転換期において戦争ロマンを喚起するメディアは活字や画像などに限定されていた。しかし、日露戦争においては電信や映画フィルムなど、同時性と可視性をもったメディアが活用されることになった。ちなみに、日本が作製した日露戦争の記録映画はタイなど東南アジアにおいて初めて映写された映画であったこと、その実写によって黄色人種が白色人種を凌駕しうるとの言説を生んでいった史実などを明らかにすることができた。

また、日露戦争時には外債募集の必要性もあって高橋是清や金子堅太郎などによる広報外交が展開され、その成功によって戦争の維持が可能となった。しかし、ドイツやソ連との戦火を交えた戦争のほか、アメリカ・イギリス・中国との外交戦として戦われた第一次世界大戦において日本は友軍国からも厳しい批判を浴びたこと、さらにはシベリア出兵において米騒動などが起きたことから情報蒐集・管理機関と宣伝・検閲機関を通じて対外的な広報外交と対内的情報統制を図ることが必須の課題として認識されていった意義とともに、外務省情報部や陸軍省新聞班が創設されていった政治過程についても分析を進めた。

さらに、女性や子ども更には植民地における異民族までが熱狂をもって戦争に参与していった心理的メカニズムと行動様式を生み出すために、心理学者フロイトの甥で、「広報・宣伝の父」と呼ばれた Edward Bernays などによって開発されたプロパガンダの手法が、戦時宣伝や「行政広報」にとどまらず、「営利本位の商業主義」に適用されていく歴史過程を明らかにすることによって、総力戦による思想動員という体験が現代の日常生活といかに直結しているのかを析出した点で重要な成果を生むことができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１３件）

山室信一、国民帝国日本における異法域の統合と格差、人文学報、101 号、査読無、2011、pp. 63-80

山室信一、帝国形成における空間認識と学知、翰林日本学、19 輯、査読有、2011、35-84

Yamamuro Shin'ichi (übersetzt von Jan Schmidt), Der Erste Weltkrieg und das japanische Empire, *Bochunmer Jahrbuch zur Ostasienforshung*, n.34, 査読有, 2011, pp.21-25

岡田暁生、郷愁の啓蒙　―　アドルノの交響曲/室内楽論について、啓蒙の運命、富永茂樹編、名古屋大学出版局、査読有、2011、pp. 404-431

岡田暁生、音楽と政治参加　―　パウル・ベッカーと第一次大戦、政治的リーダーと文化、筒井清忠編、千倉書房、査読有、2011、pp. 291-309

岡田暁生、芸術はなおも『頑張る物語』を語り得るか、季刊アルテス 1 号　3. 11 と音楽、査読有、2011、pp. 34-41 ページ

KUBO Akihiro, La Grande Guerre vue à travers des anecdotes ： notes sur la première série d'*A la baïonnette*, *ZINBVN*, vol.42, 査読有, 2011, pp.87-110

Kenta Ohji, Raynal, Necker et la Compagnie des Indes：Quelques aspects inconnus de la genèse et de l'évolution de l'Histoire des deux Indes, Gilles Bancarel (éd.), *Raynal et ses réseaux*, 査読有, 2011, pp.105-181

山室信一、第一次大戦の衝撃と帝国日本、岩波講座・東アジア近現代通史、３巻、査読無、2010、pp. 95-118

岡田暁生、前近代と超近代のはざまで　ヴィルトゥオーソ現象と 19 世紀、ユリイカ　特集現代ピアニスト列伝、査読有、４月号、2010、pp. 97－102

久保昭博、第一次世界大戦小説における口語・俗語文体―アンリ・バルビュス『砲火』のレアリスムについての一考察、『関西フランス語フランス文学』、第 16 号、査読有、2010、pp. 64-76

Osamu Hattori, A German Doctor learned Classical Medicine and Japanese Doctors and Practioners learned "Modern" Medicine: The German-Japanese Relations in the Sector of Acupuncture in the Post-War Era, in: Osamu Hattori et al. (eds.), *Japan and Japanese People: View*

from a Transcultural Perspective, LIT-Verlag, Muenster 2010, pp. 29-52
岡田暁生、ロマン派の呪縛と現代音楽の袋小路、大航海 70 号　現代芸術徹底批判、査読有、2009、pp.58－79

〔学会発表〕（計３件）

河本真理、シュルレアリスム美術の地平―痙攣するイメージと言葉、第 37 回大原美術館美術講座、2011 年 7 月 30 日、大原美術館
河本真理、切断の時代―20 世紀美術におけるクレーの制作プロセス、パウル・クレー展―おわらないアトリエ、2011 年 4 月 30 日、京都国立近代美術館
山室信一、近代東アジアの国際秩序と日本、東北亜歴史財団、2010 年 8 月 4 日、ソウル商工会議所

〔図書〕（計９件）
岡田暁生『楽都ウィーンの光と影』小学館、2012
河本真理『葛藤する形態―第一次世界大戦と美術』人文書院、2011
久保昭博『表象の傷』人文書院、2011
山室信一『複合戦争と総力戦の断層』人文書院、2010
岡田暁生『クラシック音楽はいつ終わったのか？』人文書院、2010
小関隆『徴兵制と良心的兵役拒否』人文書院、2010
HAYASE, Shinzo, A Walk Through War Memories in Southeast Asia. Quezon City, Philippines: New Day Publishers, 2010
藤原辰史『カブラの冬』人文書院、2010
岡田暁生『音楽の聴き方』中公新書、2009

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~ww1/

６．研究組織
(1)研究代表者
山室 信一　（YAMAMURO SHINICHI）
京都大学人文科学研究所・教授
研究者番号：1011470

(2)研究分担者
小関 隆（KOSEKI TAKASHI）
京都大学人文科学研究所・准教授
研究者番号：10240748

岡田 暁生（OKADA AKEO）
京都大学人文科学研究所・准教授
研究者番号：70243136

伊藤 順二（ITO JUNJI）
京都大学人文科学研究所・准教授
研究者番号：80381705

王寺 賢太（OHJI KENTA）
京都大学人文科学研究所・准教授
研究者番号：90402809

久保 昭博（KUBO AKIHIRO）
京都大学人文科学研究所・助教
研究者番号：60432324

藤原 辰史（FUJIHARA TATSUSHI）
東京大学農学生命科学研究科・講師
研究者番号：00362400

早瀬 晋三（HAYASE SHINZO）
大阪市立大学文学研究科・教授
研究者番号：20183915

河本 真理（KOMOTO MARI）
広島大学・総合科学研究科・准教授
研究者番号：10454539

小田川 大典（ODAGAWA DAISUKE）
岡山大学・法学部・教授
研究者番号：60284056

服部 伸（HATTORI OSAMU）
同志社大学・文学部・教授

研究者番号：40238027

片山 杜秀（KATAYAMA MORIHIDE）
慶應義塾大学・法学部・准教授
研究者番号：80528927

(3)連携研究者
なし